

平成 25 年度
第 47 回 中期 東京都福祉保健局委託学術研修会

主催：(公社) 東京都鍼灸師会
平成 26 年 1 月 12 日 (日)

演題および講師

I. がん疾患の緩和治療

帯津三敬病院名誉院長 帯津 良一

II. がんの緩和治療の臨床

新座志木中央総合病院緩和ケア課
無量光寿庵 はる治療院院長 鈴木 春子

「がん疾患の緩和治療」

—漢方・鍼灸・気功等を統合させて—

帯津三敬病院名誉院長 帯津 良一

がんは体だけの病ではなく、心にも命にも深くかかわる病である。だから主として体に注目する西洋医学では手を焼くのは当然なのである。ここはどうしてもホリスティック医学をもってこれにあたらなければならない。

ホリスティック医学とは体、心、命の一体となった人間まるごとをそっくりそのまま捉える医学である。また時間軸で考えれば、病というステージにとどまることなく生老病死のすべてのステージを対象とする。

私はがん治療の現場で32年間にわたってホリスティック医学を追い求めてきたが、まだ、一つの方法論としてのホリスティック医学を手にはしていない。

そこで、体には西洋医学を、心には各種心理療法を、命には各種代替療法を駆使して何とか理想のホリスティック医学に近づけようとしているのが現状である。因みに、わが病院での代替療法の中心は漢方薬、鍼灸、気功そして食養生から成る中国医学である。

一方、命には限りがある。病の中にあっても最後まで人間としての尊厳を保ち続け、穏

やかな死を迎えることをサポートするのも医療のうちである。すなわち緩和治療である。

言うまでもなく緩和治療の対象は人間まるごとである。これほどホリスティックな医学はない。多くの代替療法を駆使しながら人間の尊厳に敬意をはらうことによって、温もりのある本来の医療を取り戻し、さらには理想のホリスティック医学に肉薄できるものと確信している。

「がんの緩和治療の臨床」

—緩和ケアの実践を通して—

無量光寿庵 はる治療院院長 鈴木 春子

1986年世界保健機構はモルヒネを中心としたがん疼痛治療方針を発表した。

段階的にモルヒネや鎮痛補助薬を組み合わせ増量することにより、痛みは改善することが多いが、長期臥床による腰痛や肩こり、麻痺など動けないことによる筋肉痛や、抗がん剤の副作用によるしびれ痛み、腹水や、手術後の皮膚のツッパリなど、モルヒネのききにくい痛み、鍼灸を取り入れることは、がん患者のQOLを向上させがんの闘病に有用であると考えられる。

鍼灸は、病期の初期から終末期まで、手術や抗がん剤、放射線などのがん治療に併用しながらほとんど副作用なく治療を行うことが可能であり、また心身一如の医療であるところから、身体的苦痛のみならず精神的、社会的、実存的にも寄り添い、患者のつらいがん闘病生活に良い影響をおよぼすと考えられる。

臨床経験の中から、適応と考えられる症状や治療を報告する。

(鈴木春子先生 略歴)

1946年 茨城県生まれ。共立女子大学文芸学部日本文学科卒業。

1993年 東洋鍼灸専門学校卒業後鍼灸あんまマッサージ指圧師免許取得。

1994年 国立がんセンター中央病院で鍼灸による緩和ケアに従事。

2000年 千葉縣市川市で無量光寿庵はる治療院開設。2008年病院内の鍼灸治療室の活動が「間中賞」奨励賞を受賞。

2011年 独立法人がん研究センター中央病院を退職。

2013年 埼玉県新座志木中央総合病院緩和ケア科、辻尚子先生のもとで鍼灸治療を開始する。